

NPO 法人 芦安ファンクラブ通信

第 35 号
秋 号

特定非営利活動法人芦安ファンクラブ
事務局 南アルプス市芦安声倉一五八九・八：大滝要造
〒〇五五-二八八-二五三三 F 〇五五-二八八-二五三三

URL=<http://www.cstv.wakwak.com/~kitadake/>
E-mail=rantan@blue.ocn.ne.jp

南アルプスふるさとづくり協議会 「広河原キャンプ」冒険記

出発式でのあいさつ。二十四人の元気な声が響くと思ったら、「いい、いい、行ってきますー。」

あれ、あれ！いかにも不安そうなお話、心細く寂しげなあいさつでその初日は始まった。

このキャンプは南アルプスふるさとづくり地域協議会が主催し、芦安ファンクラブの協力のもとに行われる事業である。南アルプスの玄関口の広河原を使い、小学五・六年生を対象にした一泊二日のキャンプで、今年度はじめて行われるものである。その目的は、仲間と協力し助け合う中で、五感を使い自然を味わうことにある。

さて、いかにも弱々しく出発していった我が冒険隊隊員二十四名、指導者六名の一行はその後、どのように二日間を過ごしたのでしょうか。

広河原までの移動は、山交のバスであった。出発式でもらった班毎に色分けされたバンダナはカラフルに首に頭に巻かれてはためいてはいるものの、まだ顔は緊張感で強ばっている。それも仕方がない。この子たちが顔を合わせるの、これで二回目。それも一回目は説明会の時だけ。子どもだけの行動は今日がはじめてのことだから、笑顔など溢れることはない。バスに乗り込

み、発車時間まではまだ間があった。

しかも他のお客さんはいない。絶好のチャンスである。それでは、ここで簡単なアイスブレイクを。指導者Hのもとで、手遊び「ドングリころころ、ドングリこ」。歌に合わせて、手で鼻と耳を摘むもの。子どもたちの表情がちよつと変わってきた。最初はゆつくりと、慣れてくると早くなってきた。でも、うっかりすると、とんでもないところを摘んでしまったり。少しなじんできた様子である。つかみは、OK。

車窓の景色はというと、いつもであれば、白峰三山が出迎えてくれるはずなのに今日は姿を見せてくれない。今年度は戻り梅雨で、天気が安定せず、ちよつと残念な思いがした。

そういつているうちに広河原に到着。バスから降りると、周りには登山者がいっぱいいた。子どもたちの顔もちよつとしたアルピニストに見えてくるから不思議である。吊り橋を渡り、幕営地へ。

現地では指導者五名が手早く、一輪車（ネコ）で荷物を運んでくれ、仕分けもしてくれてあった。さて、本格的な活動が始まるぞ。しかし、冒険隊はチームとしての結束がまだ十分ではない。そこで、本格的なアイスブレイク。指導者Sの登場だ。ネイチャゲームはおてのもの。「このフラフープは円盤から操られて降ろそう。でも、みんなの力で地球に降ろそう。」右手の人差し指一本でフラフープを支え、地面に降ろすん

だ。しかし、何回やってもフラフープは、上に、上に。不思議ですね。このあとに、



円盤は何処へ行くのやら？

人間知恵の輪。もう子どもたちの緊張もほぐれ、冒険隊としてのチームの結束も十分だ。

そうなれば、今夜のねぐらづくりだ。テントをはじめ設置する子が多かったが、指示を聞いて動いていた。特にパイプを伸ばすときの、ゴムの感触がおもしろかったようだ。また、いよいよ立ち上げるときに、パイプのしなりにびつくりして、「折れちゃうよ。大丈夫な

の。」と、心配してくれる子も。できあがったテントは、子どもたちのお気に入り。気温が上がってきたので、蒸し暑くて大変なのに、テントの中も、蒸し暑くて大変なのに、テントの中に入れておいたり、おしゃべりしたり。子どもたちにとって「このテントも自分たちのお城なのかもしれない。我々大人が失ったものを思い出させてくれたひとときであった。

腹「しらえがすんだら、自然遊地散策だ。子どもたちにカードを持たせ、五感をフルに発揮させて、自然を見つめさせる。氷河時代に北岳から運ばれてきた巨大な岩に見つめられる中で、子どもたちの五感はときずまされれていた。

「熊の爪痕があった。」
「鹿の角の研ぎあとだ。これは足跡だ。」

「この苔。とってもいいニオイがする。」
「鹿の糞がいっぱいいた。」そして、極めつけは蟬の羽化の発見である。幼虫の背中が破れ、透明感のある成虫が六年間の地中での生活から、日の当たる世界へと飛び立とうとしている。まさにその瞬間に出会えた。みんなの目はもう釘付けた。ずいぶん時が流れたが、誰も動かなかつた。・・・しかし、時間がかかる。しだいに何人かが、しびれをきらして、違うものを見に行くか。また少ししたら来よう。すると、指導者Mが素晴らしい感性を発揮して、子どもたちにプレゼントを。可憐に咲く



セミの羽化との感動的な出会い

「レンジショウマ」だ。下を向いて楚々と咲く姿に、おもわずカッワイイ！

日活動したあとは、腹がすくもの。今晚のメニューはカレーライスだ。子どもたちには野菜を切る作業が待っていた。なんといっても大人数だ。切る野菜の数も半端ではない。そこで登場したのが女性指導者だ。指導者I、野菜の皮の剥き方の伝授。指導者O、子どもたちの作業分担、サラダの盛りつけ、さすがこの道数十年、

また、大きな鍋で三十人分のカレーを煮詰めてくれたのは指導者S。三つ星シエフ顔負けの腕前であった。ちなみに、今回の野菜のほとんどは、指導者Mからの提供であった。超オイシー！

する子も出てきて、それぞれが満足満足。子どもたちは山の生活の約束も学んだ。トイレの使い方。絶対家ではしていないトイレットペーパーの処理の仕方。また、食器はペーパーで拭き取って各自保管。こつこつとをこして、みんな

で貴重な自然を守っていつているのだ。食後の楽しみ。本来であれば、星空観察。しかし、天の神様は我々に微笑みではくれなかつた。でも、こんなことで負けられるものか。タープの中で指導者Hの星の話。みんな、目では見られないが、心の目で見てご覧。どうだ、みえるだろう。うん、みえる。そうだ。そうだ。次は、芦安の民話だぞ。そして、方言だ。空の星はみえなかつたけれど、子どもたちの目は星のように輝いていた。

幕営地の就寝は早い。八時にはテントに潜らせた。しかし、興奮気味の子どもたちにとっては、寝るにはもつたない宝の時間だ。テントの中で「そぞそ、さては隣のテントにちよっかいを出す。まあ、こんなもんでしよう。しかし、他の登山者に迷惑がかかってはいけない」と指導者Sが寝ずの番。こ苦労様でした。

一夜が明け、目が覚めた。天気回復を願ったが、思いは届かず今日も雨模様だ。指導者女性三人衆とMはもう朝食の準備。手早く野菜を切り、パンにバターを塗り、野菜、ハムをはさみ、サンドイッチが積まれていく。豪華ホテル並みのバイキングサンドイッチのできあがりだ

昨日に引き続き。タープの中での食事だが、昨夜のバトルの割にはよく食

べた。心を込めて作って頂いた指導者に感謝感謝。

最後のプログラムはストーンアートだ。河原でおもいおもいの石を拾ってくる。その石から、イメージを膨らませて、色塗りをして作品に仕上げる。広河原キャンプの思い出づくりとのおみやげにするものだ。まずは、三個ずつ石を探そう。五感を働かせて、これにしようか、あれにしようか。簡単なようで、迷ってしまうものだ。決まったら、広河原山荘の三階を貸してもらって、いざ製作開始。まず、一個目、はじめてのことなので、各自慎重に行こう。石の形から連想して、「ニや魚、かわいいキヤラクター」の絵を描き上げた。また、風景を描いて置物にしたりと熱心に作品づくりは続いた。

作品が仕上がる頃には、天気回復していた。な、なんと皮肉なものだ。昼食には時間もあるので、ちよつと散歩に出かけよう。吊り橋を渡って、ウエストンの碑を見て、ぐるっと回って昨日散策した場所へ。蝉はどうなっているのだろう。残念ながら、蝉は飛び立ってしまっていた。きつと、どこかの木に留まって夏を楽しんでいることだろう。

さあ、最後の食事だ。そうめんと唐揚げだ。この頃になると、日もさんさんと照っていた。うらやましいが、ここまできたら無事に終えることが大切だ。自然を恨んでも仕方がない。しかし、唐揚げの味付けは最高だ。ガーリックの二オイが食を誘うし、疲れた体に気力を振るい立たせてくれる。

出発時間までは、ゆっくり過ぎた。子どもたちも気のあつた仲間と過ごしている。愛称で呼び合っている子もい

れば、即席のあだ名を付けている子たちもいた。はじめはよそよそしかった子どもたちが自然の中で活動することとで一体感が生まれきた。共に励まし合い、協力し合い、時にはぶつかり合ななかで、成長した姿を確信した。広河原をあとにして、解散会は芦安山岳館で行った。保護者の方々も出迎えにきてくれる中、探検隊代表の感想



小さなお城に大満足

発表。四人の発表者の言葉には、二十四人、一人ひとりが感じたことのすべてが凝縮されていた。また、隊員一人ひとりには写真入りの修了証書が渡された。そして、解散会終了後、本当の解散を示す意味での関東一本締め。さらに保護者に向かつての「ただいま。」「せーの。」「た、ただいまー。」「ちよつ

と指導者の期待に反して、盛り上げに欠けてしまった。でも、心の中ではきつと山を揺るがすような叫び声をあげていたのに違いないと、信じている。

はじめての計画であり、どのくらいに応募があるかと不安を抱えた中で取り組みであった。今回、行ってみて反省する箇所は山ほどあると思える。それでも、指導者一人ひとりが、自分の持ち味を出すことで、無事に乗り切ることができた。そして、何より、二十四名の若き探検隊員が、広河原を舞台にして元氣よく活動し、感動を覚えてくれたことで、大成功だったと信じている。「このキャンプを期にして、この探検隊員が将来、さらに高い山へ、そして世界に誇ることのできる南アルプスへ向かう始点となり得たのではないかと指導者六名はうなずきあった。

芦安ファンクラブ 掘内記



可憐なレンゲシヨウマ

春の登山教室

「鳳凰三山完登」編

五月二十三、二十四日、特定非営利活動法人芦安ファンクラブ、芦安山岳館共催による春の登山教室が鳳凰薬師岳、観音岳で行われた。

通常では春は南アルプス前衛の低山で行われていたが、今年は南アルプスのすばらしさを旬の時に味わっていただきたく、まだまだ残雪深い鳳凰山系を選んだ。何よりも稜線からの白峰三山や甲斐駒ヶ岳の眺望のすばらしさは筆舌に尽くしがたいものがあるからだ。

実は過去二回のチャレンジがいずれも台風や雨天の為、目的を完遂していない。リピーターの中にはリベンジに闘志を燃やし、参加した人も多い。一日目は晴天。南御室小屋までのゆっくりとした登りを楽しむ。見晴らしの良い山火事跡の辺では、残雪眩い白峰三山が左手に聳え一行をにこやかに迎えてくれる。樹林帯に入るとすっかり雪景色になりうっかり踏み跡をはずすと膝上まで雪にもぐることになる。参加者には時期はずれの嬉しい体験になったようだ。小屋の周辺はすっかり除雪され、水場やトイレはすでに通常使用可能になっていた。自由時間を使って屋外で研修会が行われた。

今回は「鳳凰山雑学」のテーマで、南御室小屋管理人の小林氏から最近の鳳凰三山の動植物や登山の傾向についての話があり、その後、芦安ファンクラブの自前講師より鳳凰三山の歴史、特に山名論争について話があった。その後小屋の中で全員による意見交換会が行われた。

雪混じりの観音岳で皆いい顔、でもさぶ〜



翌朝は時おり霧雨が降るあいにくの天気になったがそれ程悪くないので薬師岳そして観音岳を目指す。小屋裏の急登からアイゼンを装着し氷雪に蹴りこむ。樹林帯の雪道を登りきると砂払岳から先の稜線には雪がなく、薬師岳小屋からは花崗岩の感触を味わいながら自然庭園とも思われる稜線の散歩を楽しむ。観音岳が近づくにつれ、雨は横なぐりの雪となり参加者を驚かす。山頂からは白峰三山の中腹、地蔵ヶ岳などが薄い霧の中から見え隠れし、かろうじて周囲の山の位置関係だけは解ってもらえた。雪が舞う中慌てて集合写真を撮り、帰路に向けきびすを返す。時おり振り返ると、雨具に隠れた参加者の顔には目いっぱい笑顔が広がっていた。

文・画 芦安ファンクラブ 清水(准)

第二十一回登山教室 百花繚乱の北岳へ

今年は何年にも無く雪が多く直前に成ってコースの変更等多くの方々に忙しい思いをさせてのスタートに成ってしまった。

塩沢館長立合いの元、参加者全員の受付を時間内に済ませ、広河原へ急ぐ車窓より眺める白根の山々も、しだいに青空にくっきりと聳え、前日の梅雨明けの二ニューズと共に、好天を確信する。吊り橋を渡って山荘前、Sさんの司会でセレモニーを済ませ、Hさんの軽快な号令で入念に準備体操をし、一斑二班の順に歩き出す。キタダケソウ観察会の時満開だった、クリンソウも今は僅かに花の存在を残すのみと成っていた。

お池尾根コースへの分岐で最初の休憩を取り大樺沢コースへ、浅い流れに靴を濡らして轟々と流れる本流に沿う道を行く、仮設の橋の手前で一息、最初に迎えてくれたのは、ミヤマハナシノブ薄紫のやさしい花、隣にカラマツソウも見事に咲いている、雪溪の入

り口で雪上歩行の練習と言ってもこんな気持ちで歩きましょう程度の事を行い、雪溪を越えて二股でトイレ休憩、ハクサンフウロ、タカネグンナイフウロなど愛で



ながら雪田に着き昼食、喋って食べて満足、先程まで足が不調だったKさんも元気に歩き出す、下ってくる人が稜線は風が強いよと口々に教えてくれる。一面のシナノキンバイの中ハクサンチドリやクロユリも咲き、百花繚乱の道を稜線に上がる、



確かに風は強いが、甲斐駒、仙丈、富士山は雲海に裾を隠しむごとな風景を見せている、稜線に咲く花は、ハクサンイチゲ、オヤマノエンドウそんな中に、雷鳥の親子が姿を見せてくれる、雛はチヨコチヨコと母鳥はゆつたりと、急いでシャッターを切る。肩の小屋へ着いて見上げる頂上の上の空は雲がすごい速さで流れていた。小屋に入って、落ち着いた気分が夕食前の一瞬、小屋の方とスタッフの楽しく勉強に成る話に聞き入る。ほんの少しのお酒の後、美味しい食事を頂く。各人部屋へ戻り寝袋へもぐる、明日の天気を気にしながらおやすみ。



「日が昇るよ」の声に急いで外に出る、間一髪こ来光を楽しむ、快晴、風も弱く最高の登山日和、朝食もそこそこに出発、朝一番の登り、はやる気持ちを抑えて慎重に足を進め山頂へ、Hさんの三角点の説明、昨日の話に出た、祠の屋根の確認、記念撮影と今日の北岳は「憩いの峰」だ。北岳草を見るため山頂を越え、下りだして直ぐ狭い所、交代で北岳草を確認、分岐では、チヨウノスケソウもカメラに収め、トラバース道まで下る、あれが北岳草これはハクサンイチゲと指をさす。

お菓子を食べたり、富士をバックに写真を撮ったり、山荘にヘリが何度も飛来していた。山頂へのきつい登り返しに汗して、再び頂上で休憩、目的を果たした満足感後は下りの安堵感、皆樂しげに話しが弾む、山頂を後に肩の小屋へ下り小屋のご好意でコーヒーを

ご馳走に成る、預けた荷物をパッキング、小屋の人に見送られ白根御池へ、途中シナノキンバイの群落のなか記念写真を撮り、さらに下る、御池でJ氏が出迎えて下さり、スタッフ皆元気が出る思いだった。昼食のカレーでお腹も満たされ広河原へ、予定時刻を過ぎバスに間に合わすため修了の挨拶もそこそこに吊り橋へと送る、最後の参加者と、付き添って下さったO氏を迎え帰路に付く。

参加者の歩行速度もさまざままで最初と最後が随分離れてしまったが、無事終る事が出来、二日間の好天とスタッフの方々に感謝です。

芦安ファンクラブ 石川 記

